連載

ふるさと Something NEWS

第30回

コロナ危機に思うこと
――都市・田舎・自然・人間

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼コロナウイルス・シンドローム

現在、勢力を拡大している新型コロナウイルス・パンデミックは、人間の集団社会生活への挑戦とも警告ともとれる。こうした集団ウイルス症状は、これまで牛・豚・鳥などでも起こったが、今回は世界を支配していると思いがちな「人間」に起こった。その対策に、戦争という言葉も用いられているが、戦い相手を「コロナウイルス」とするのであれば許されるだろう。

英語では、罹患した時の症状は、コロナ・シントムスCoronavirus symptoms(s)といわれる。かつて、「チャイナ・シンドローム」というアメリカでの原発のメルトダウンが地球の内部地殻を通り中国に波及するという、映画に由来した言葉が流行ったことを思い出す。

世界にまん延し、パンデミックの言葉の使用を認められた「コロナウイルス」は、中国から地表で人間を介して世界に、そしてもちろんアメリカにも波及した。「コロナウイルス・シンドローム」ともいえる。

今回のコロナウイルスについて次の二つの側面から本コラムの主題としたい。一つは「都市と田舎（地方）」、もう一つは「人間と自然」、という側面からである。

▼都市と田舎（地方）

この側面については、都市ｖｓ田舎と書けるが、都市&田舎とも書ける。筆者は、千葉大学の都市環境システム学科に勤めていた。大学は時代や世相に合わせて目まぐるしく体制が変わるが、信頼性システムや都市環境エネルギーなどの分野を担当していた。そのキーワードは、「都市」であり「都市環境」である。都市とは「人が集まる場所」というのが、学科の見解であり対象は広い。こうした見解では「田舎」も「都市」である。が、二つでは機能が異なる。

「都市」は、人が中心であり、なるほどcityはcitizenと語源が同じである。したがって都市には、多様な職業や職種、そして職能があり、施設や装置、そしてシステムがある。都市環境システムと呼ぶにふさわしい重要性がそこにはある。

「都市」と書くと、それには「市」が重ねてあり、市場（マーケット）が見えてくる。商品やサービス、そして情報が行きかう。ところが、経済性や価値・効率性という観念が、支配してくる。

田舎はどうだろう。筆者は、これを「デンシャ」と呼んでみたい。それは、countryhouseであり、屋敷や邸宅と結びつけることができる。家中心や土地中心の暮らしの意味合いが強くなる。その家や財産を守るにふさわしい仕事や家業があった。「舎」は、「人」（ひとやね）、つまり家・屋敷の意味であり、それが「吉」とも感じられる。

都市と田舎の暮らしのそれぞれを否定できない。どちらにも人間が住み生きている。前提とされるのは、安全安心、健康、そして暮らしである。安全安心の確保、健康の維持、充足できる衣食住、職業と学習、余暇などが、必須要件で課題となる。

しかし、現代では、田舎ではなく都市の方に魅力があり、磁場が強い。日本でも国際的にも、田舎から都市への人口移動は、イギリスの産業革命にその起源を求められるが、それは有史以来、現代まで続く一般的な傾向ともいえる。未来においては、地球から宇宙への人口移動がもてはやされる局面があるかもしれない。

山形県金山町には、金山住宅という建築様式があり、伝統的で地元密着の田舎の街並みを守っている。その取り組みの一環として街中にはコンビニが排除され、バイパスの国道にあるだけである。歴史と観光をまもりつつ、地方経済と暮らしの町づくりをしている。世界が求めるSDGsの選択がそこにはある。都市と田舎の調和と並立が求められる。

▼人間と自然

「人間と自然」というもう一つの側面について述べる。東京銀座での用事を終え、裏通りを歩いていたら偶然、気になる映画のポスターを見つけた。『ビッグ・リトル・ファーム』〝理想の暮らしのつくり方〟とあった。映画館に入ると、5分後に本編が始まるという。チケットを買い、この主題に合致した90分を過ごした。

英語の原題は、"the Biggest little Farm"である。やせ衰えた土地を、自然の再生力を呼び起こして、エコ（＝オイコス、生息圏）を創成する8年間の取り組みのストーリー（実録）であった。

主人公は、ジョン・チェスターとモリー・チェスターの新婚夫婦。殺処分される直前の犬トッドを飼うが、街のアパートでは吠える声に迷惑がられ、移転先を探した。ロサンジェルス郊外に、放置されて地価の安い広大な農地が見つかった。二人は、自然と共生した暮らしと、伝統農法を基本とした農業に取り組む決心をした。伝統農法は、著名な専門家アラン・ヨークに教えを請い、痩せた土地を蘇らせる方法を学び、苦難と歓喜の8年間の取り組みを映画として記録した。

ビッグ・リトル・ファームの画像

自然の要素である微生物や虫、小動物、鳥類、害獣のコヨーテさえも自然の循環には必須な種であることを、失敗や困難を経て学習している。牛の糞が草木を育て、土地を肥沃にし、それが保水能力を与え、干ばつや大雨からも土地を護ってくれる。微生物は土地に活性化と浄化の能力を高める。その自然循環の生息圏をつくるのには、5年～7年間を耐え抜くこと要するという。

この映画は、自然の美しい描写と、存在する生命の瑞々しさが感動的である。自然の中で文字通り必死に、生と死を繰り返す循環を教えてくれる。その結果の生産物は、無添加で無農薬の自然の栄養と保存性を与えてくれる。自然は豊かな自然の源である。

▼自然と至然

自然を踏み台にして、科学技術をツールとして生きている現代は、その姿の原形、そのまんまという意味の「自然」を傷つけ、壊している。病んだ自然でもある。その自然を、本来の自然に戻すという意味や行為を「至然」と書くこと筆者は提案している。

「そのまんま」を意味する「然」、始まりを意味する「自」。行き着く先を意味する「至」。〝from 然〟が「自然」であり、〝to 然〟が「至然」である。自然に帰る、帰すことを「至然」と呼ぶことを広めたい【註1】。

人間も自然の中で、生きる方が健康であることが感じ取れる。そうした田舎生活が、都市生活のオルタナティブであると気付く。そして、自然に由来する生き方の方が、持続可能なはずではないだろうか。それは、多くの人々が理解している。しかし、素直にライフスタイルや居住先をかえることができない。何か規範のような指導概念が欲しくなる。その一つに挙げられるのが「エントロピー」ではないかと考える。

しかし、エントロピーもまた分かりづらい概念である。エントロピーは、エネルギー利用や生成における無駄や浪費の発生を抑えるという指導原理であるといえる。「もったいない」ことを、増やさないという数値概念といえる。自然エネルギーの利用は、エネルギーの有効利用でもあり、エントロピーを増やさない手段になる【註2】。

▼コロナウイルスから学ぶ

さて、本稿はコロナウイルス・パンデミックに関連付けて書き出した。実は、筆者もコロナウイルスは、日本ではこれほど拡大するとは考えていなかった。中国での必死の対策で終息したとの情報を得て、日本でもロジスティック曲線のように後追いして終息すると思っていたが、感染者からの新たに感染が伝播している。コロナウイルスの感染は、地方に比べ首都圏や大都市に感染者が多い。感染者との接触確率が人口比率との相関性が高いことによる。

地震やその他の大規模災害においても、大都市での現場にいる確率は人口密度との関係で、そうしたハザードに対するリスクの確率が高くなる。

いまコロナウイルス対策が、鎖国状態でなされているが、各国の特徴が現れている。それを活かして、有効に終息することを期待したい。都市と田舎、自然と人間の関わりは、それぞれの個性や特徴を活かして持続可能を求めたい。

【註1】「至然」については、本紙コラム『「自然」ｖｓ「至然」――いま、新しい時代のために必要な言葉』（第96号（2018年1月22日）に掲載。
http://www.kofuza.jp/images/nen_2018_25.pdf

【註2】「エントロピー」については、本紙コラム『自然とともに暮らす意義とは?――「エントロピー」が警鐘すること』（第102号（2018年4月16日）に掲載。
http://www.kofuza.jp/images/nen_2018_31.pdf